

このすば×メダロット

あるい棕

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カズマたちが各々メダロットを組み立てて遊ぶだけ。
遊ぶだけ。

目次

プロローグ	【夢】の途中	—	1
第一話	水よ今日もありがとう	—	5
第二話	風と火と爆焰の記憶	—	11
第三話	女の夢は防御力だ	—	16
第四話	カズマ注意報	—	23
第五話	たこ殴り大作戦!	—	27
エピローグ	ゆんゆん、グレる	—	39

プロローグ 【夢】の途中

「頼む。この通り！」

「ええー……」

俺は懇意にしているロリサキュバスに対して、頭を下げまくっていた。

やたらと低姿勢な俺の態度に、ロリサキュバスは困った表情を浮かべる。

この異世界に住むサキュバスは、任意の【夢】を見せるスキルを持っている。

そのスキルは簡単に言えば、男性の脳内イメージを拾い上げることで理想の女性を夢枕に登場させるといふものなのだが。

【夢】で自由に設定できるのは、何も相手役の女性に留まらない。

女性を抱くまでの物語を演出するために必要な男性やモンスターだったり、実際のプレイ中に用いるベッドやおもちゃといった無機物、更には舞台となる宿屋、街、城といった人工建築物や、龍が潜む洞窟といった自然構造物など……。そういったものも自由に設定できるのだ。

それは地球で流行っていたVRMMO小説のように、脳内に仮想世界を実現していると言っても過言ではない。

そう、サキユバスの【夢】は、理想の『女性』だけでなく、理想の『世界』を作り出し楽しむことができるのだ。

そして俺は、ロリサキユバスにいつもと違うことを提案していた。

それは――。

「はあ、ゲームやアニメの世界ですか。カズマさんの脳内に再現して、みんなで遊びたいと」

「そうなんだよ」

俺は、かつて熱中していた『メダロット』が実在する世界で遊ぶことはできないかと、ロリサキユバスに頼み込んでいた。

なぜこんなことを言い出したかと言うと、紅魔の里で発見したゲームガール、その中になんとメダロットのソフトが内蔵されているのを見つけたからだった。

おそらく過去に紅魔族を作り上げたという日本からの転生者が、おぼろげな記憶から頑張つて再現しようとしたものなのだろう。細かいステータスやディティール表現など俺の記憶と違うところも多少あったが、それは紛れもなくメダロットのゲームであり、俺に「また遊びたい」と思わせるには十分なものだった。

そしてサキユバスの【夢】ならば、かつて俺が妄想した、メダロットが実在する世界で遊ぶこともできるはず――。そう思つてロリサキユバスに声をかけたのだ。

「そりやできないわけではないですけど……。女性を抱く【夢】でない私は精気を得ることができないんですよ？ 私にまた飢えろと？」

「埋め合わせはするから！ 頼む！」

手を合わせて拝みだした俺に、ロリサキュバスはしようがないなあといったカンジで溜息をひとつ漏らし。

「……わかりました。こちとらカズマさんの【夢】の中に再現された地球でエロゲーなど勉強させてもらってる身ですしね。毎回と言われると困りますが、たまにはそういうのもいいでしょう。……それで、今回【夢】に参加されるのは、アクア様を含めたそちらの皆様全員ということでしょうか？」

「はい、そうです」

「その……頼んだ」

「よろしくお願いするわね」

ロリサキュバスの視線の先で、めぐみん、ダクネス、アクアがそれぞれ返事をした。紅魔の里で見つけたゲームガールはパーティーの共有物として皆好き勝手にプレイしていて、全員がメダロットにハマっていた。そして俺が「サキュバスのスキルを使えばメダロットで実際に遊べるんじゃないか」と呟いたのを聞いて、やれ自分も自分もと乗っかってきたのだ。

「よし、それじゃ確認するぞ。みんな自分のパートナーとなるメダロットを想像しておけ。【夢】の中でもそいつがパートナーになるんだからな」

俺の言葉に、全員が頷いた。

「それでは皆様、いきます。私の魔力を受け入れてくださいいね……」

「おいアクア。悪魔の魔力だからって抵抗するんじゃないぞ」

「言われなくてもわかってるわよ。今ならサキュバスが悪意を持てばたちまち死ぬくらいには抵抗を落としてるわ」

……そこまで極端なものかどうかと思うが。

しかし俺の知らないところでアクアと友好の契りを結んでいたと言うロリサキュバスは、女神の無防備宣言にも特に表情を変えすることもなく淡々と作業を進め。

「それでは皆様、いい【夢】を——」

俺たちを、【夢】の世界へと誘ったのだった。

■ 続く ■

第一話 水よ今日もありがとう

お友達用ホビードロブット、メダロットの構成要素は大きく分けて三つ。

ひとつ目は、基本フレームとなる『ティンペット』。

ふたつ目は、頭脳となる『メダル』。メダロットの魂ともいうべきもの。

最後に、外骨格や筋肉となる『パーツ』。頭部・左腕部・右腕部・脚部に分かれていて、この組み合わせを変えることでメダロットは多彩な能力を発揮することができる。

さて、このパーツの組み合わせだが、組む人の性格が割と出る。

人によってはデメリットがあるとわかっていても格闘攻撃パーツばかりで揃えたチームを作ることもあるし、敵の攻撃を耐えに耐えて貯めたエネルギーでメダル固有の必殺技『メダフォース』を発動し逆転を狙う構成もある。他にも攻撃パーツは最小限に、トラップなどの妨害パーツを中心に組む人だっている。

メダロットを操る人——メダロッターによって、組み上がるメダロットは千差万別なのだ。

「さあ、お前らはどんなメダロットを組んだんだ？」

「ふっふっふ、それじゃ、まずは私から紹介するわ！」

【夢】の世界に構成されたビル街に降り立った俺達。

その中でアクアが我先にと手を挙げた。自分が組んだメダロットを早く見せたくてたまらないのだろう、妙に鼻息が荒い。

あるある。かっこいいメダロットを組めたと思っただけで、スクリーンショットを撮ってSNSにアップしたくなるし、レアメダロット一式を手に入れたら誰にかに自慢したくなる。かわいいメダロットのパーツを手に入れたら……あまり公言することなく3Dビューアーを回転させまくるが。

アクアは腕時計型の管理ツール『メダロット』を操作し、メダロットを転送した。「私が選んだメダロットは、この子よ!」

「ブレザーメイツか……」

「よろしくお願ひしマス。アクアさま」

「うん、うん! よろしくね。ブレザーメイツちゃん!」

——ブレザーメイツ。

ブレザーを着た女子生徒をモチーフにデザインされたBLZ型メダロット。

頭部から両サイドに伸びる大きなツインテールの中に他のメダロットを補助する索敵・隠蔽機能を備え、両腕には損傷した装甲を回復することができる機能をそれぞれ搭

載しているメダロットだ。

「さ、カズマ。早速ロボトルしましょう。タイマンで、真剣ロボトルよ！」

「……うん？」

「聞こえなかつたの？ ロボトルよロボトル。メダロット同士を戦わせるロボツトバトル、略してロボトル。メダロットの花形でしょ？」

「んなことは言われなくてもわかってる。……参考までに聞くが、アクアはどうしてこのメダロットをパートナーに選んだんだ？」

「ブレザーメイツは回復と支援が得意なメダロットと言うじゃない。それに、機体の色は青だし、とつてもかわいいわ。私のパートナーとしてふさわしいメダロットだと思うの」

「そうか。そうか……。それじゃはじめるか。真剣ロボトル」

これから起こるであろう事態を想像して微妙にテンションが下がった俺だったが、勝負は勝負だ。仕方がない。

ブレザーメイツが「え？ え？」ってカンジでオロオロしてるが、仕方がないことなんだ……。

「それでは私がレフェリーを務めさせていただきます。……『合意と見てよろしいですね？』」

「おう」

「もちろんよー！」

「それでは——」

「ロボトルファイト！」

——1分後。

「なんでよ——！」

勝ったのは当然俺。

アクアは俺のメダロットにボコボコにされたブレザーメイツを抱きかかえて、ヒールをかけまくっていた。

仮にも女神のヒール。生物以外にも効果があるのか、メダロットを厳密には生物だと認定しているのか、とにかく装甲がみるみる治っていく。……いや、これはロボトル終了時に装甲を全快させるスラフシス脱皮テムの効果か。

「どうして!?! どうして一方的にやられちゃったの?」

ヒールをかけながらも喚き続けるアクアに、見かねてめぐみんが声をかける。

「あ、あのですねアクア……ブレザーメイツは回復と支援が得意なメダロットというのは間違いではありません。間違いではないんですが……しかしブレザーメイツは、回復

と支援しできないメダロットなんですよ」

「!？」

「ま、そういうことだ。ブレザーメイツは攻撃パーツを持っていないメダロット……。相手を機能停止させることが目的のロボットだと仲間の支援に徹するしかないが、その仲間もないタイマンロボットとなればな」

「なっ……。!? そ、それなら事前に教えてくれてもよかつたじゃない！」

「いや、そのですね……。アクアがあんまりにも自信満々だったのでつきり何か考えがあるものとはかり……」

「ごめんなさい。アクアさま……。勝てなくて……」

「ああっ!? う、ううん、ブレザーメイツちゃんは何も悪くないのよ! 悪いのはカズマと、姿を見せないまま一方的に攻撃してきたカズマのメダロットだからね」

アクアはそう言っつてこちらを睨みつけてくるが……。

「なんとでも言え。姿を見せないのも作戦だ」

「うう……」

俺のメダロットはいまだ皆の前に姿を晒していない。

見た目だけで戦術の8割がわかるのがメダロットなので、パーツの能力を駆使して姿を隠させていた。

「しょうがありませんね……。アクア、あなた達のかたきは私達がとってあげましょう」
めぐみんは立ち上がると、こちらに向き直った。

「私はカズマのようにこそそとメダロットを隠すようなことはしません。戦術予想、弱点計算、どんとこいです。それでも覆すことのできない圧倒的な火力で殲滅してみせましょう」

「ほう。そこまで言うなら見せてみろよ。めぐみんが組んだメダロットを」
「はい。私が選んだメダロットは、これです——！」

■ 続く ■

第二話 風と火と爆焰の記憶

「私のメダロットは……アークビートルです！」

「だよな」

「知ってた」

「むしろそれ以外何を選ぶのってカンジよね」

「な、なんですかその微妙な反応は!? ほら、この圧倒的火力! そして機体カラーのまぶしい赤! この格好良さと私とのマッチ具合に、もつと感嘆の声をですね……!」

確かにマッチしている。アクアですら予想できるくらいには。

きつとメダロットを知っていて同時にめぐみんも知ってる人なら、誰でも予想できた選択だろう。

——アークビートル。

それまで存在したKBT型が先端が二股に分かれている角を頭頂部に生やしていたりと、日本に多く生息するカブトムシを意識したようなデザインだったのに対し、カブトはカブトでもヘラクレスオオカブトをモチーフとしたこいつは、二本の角を頭部と胸

部から生やしているという実に斬新なデザインの持ち主だ。

そしてこいつが持つ最大の武器は、その前方に突き出た二本角を電極として放たれる超強力な貫通ビームである『プロミネンス』。パーツの装甲は薄く、充填や放熱といった準備時間は異常に長く、しかしその弱点だらけの頭部から放たれる一発は全メダロット中最大火力。ただし、一回のロボトルで一発しか撃てないという制限付きのロマン砲仕様。

爆裂魔法と——いや、めぐみんとイメージが被るところが多い。

まさにめぐみんのために用意されていたと言わんばかりのメダロットだ。

「ふふふ……カズマ、アクアを倒していい気になっているようですが、メダロットは力こそパワー！ 姿を隠してこそこそ攻撃を仕掛けてくるあなたのメダロットなんぞ、辺り一面もろとも吹き飛ばしてくれましょう！」

「お前本当に知力高いのか？ 実は嘘なんだろう？ ん？」

「アクア、ブレザーメイツ。貴女達のかたきは私達が取ってみせます」

「めぐみん……」

「めぐみんサン……」

俺の言葉を無視して宣言しためぐみんに、アクアとブレザーメイツがそろって目をうるうるさせている。しかしその感動も、アークビートルの次の行動で吹っ飛んだ。

「さあ、行きますよ。我が使い魔、アークビートルよ！」

「ガオオオオオオン!!!」

「ひいひい!!」

アークビートルが獣のように吠え、それに気圧されたアクアとブレザーメイツが肩を寄せて震え上がった。

あー、あれはアニメ基準のアークビートルか……。

記憶を失いながらもマスターに付き従い、戦い続ける悲しきメダロット。めぐみんの琴線に触れるものがあつたのだろう。

「いいぜ、相手になつてやる」

「では僭越ながら、レフェリーは私が務めよう。それでは——」

「ロボトルファイト！」

——5分後。

「ずるいです！ おかしいですよ！」

「これもメダロットだ」

激昂するめぐみんの足元で、アークビートルは無残な姿を晒していた。

もちろん下手人は、未だ姿を見せない俺のメダロットである。

「グオ……オ……」

「そうですね。ズルいですよね。まさか行動そのものをキャンセルしてくるなんて。真つ向からやる気がないのでしょいか」

「だからそういう戦い方もメダロットだつて言ってるんだが。……アークビートルの攻撃は確かに強力だ。だけどどのパーツも長い準備時間が必要という弱点がある。だつたらその準備時間中にこちらの行動を割り込ませ、パーツの発動自体を封じればいい。なにも力押しだけがロボトルの華じゃないってことだ」

「うう……」

「オオ……」

未だ獣のような唸り声を上げるアークビートルを抱きかかえつつ、めぐみんはこちらを睨んでくる。

睨む、そして睨まれる俺達の間、ダクネスが割って入ってきた。

「まあ落ち着け、めぐみん。今度は私がかたきを取ってみせようじゃないか」

「ダクネス……?」

「やけに自信があるようだな?」

「ああ。パーツの能力で押すだけがメダロットの全てではない——それを体現する戦術を思いついてな。その戦術を早く誰かに試してみたくてしようがないんだ」

妙にウキウキした様子のダクネスに、そういうことかと納得する。

あるある。新しいコンボを思いついたときに、それが本当に機能するか対人戦で試したくなることは。

「なるほど。じゃあ見せてみるよ。ダクネスが組んだメダロットを！」

「ああ。私が選んだメダロットは、こいつだ——！」

■ 続く ■

第三話 女の夢は防御力だ

「私が選んだ機体はこいつだ！」

「ヨロシクお願いシマス」

「ほう、ナイトアーマーか」

「ああ。全身重装甲で、味方に対する攻撃を代わりに受け止める騎士型のメダロット……私にピッタリだろう。そして色も……、色も……うう……」

ダクネスが項垂れる。

ナイトアーマーの全身は紫色。イメージカラーが黄色であるダクネスとは、似ても似つかない。

「無理すんなよ。機体のカラーと自分のイメージカラーを合わせたのは前の二人が勝手にやったことで、元々そんなルールはなかったし」

俺のフォロローに、めぐみんが続く。

「そうですよ。……というか、機体カラーが黄色で防御系のメダロットと言ったら他にもいたではありませんか？ バグステインクとか」

「嫌だ。バグステインクはビームとか撃つから。私の趣味ではない」
「そ、そうですか」

「まあ攻撃も防御もできるメダロットより、全身これ防御のナイトアーマーの方が、最強の盾ダクネスのパートナーってカンジよね！」

「……そうだろうか？ そう思ってもらえるなら嬉しいんだが」

「そうよ！ 不器用で防御しかできないってところも、まさにダクネスってカンジで……って痛い痛い！ なんで怒るの？ 褒めてあげたのに！」

マスターをバカにされたと思ったのか、ナイトアーマーがその大きな盾の側面でアクアを小突いて、慌ててブレザーメイツが止めに入った。

「いたた……ありがとねブレザーメイツちゃん……。あれ？ どうして私の頭にリペアをかけるの？ メダロットの回復技は装甲内のナノマシンに信号を送って活性化させるものだから、私にかけても意味はないわよ？」

「ア、アクアさまも、ヒールかけてくれたカラ……」

「ブレザーメイツちゃん……なんていい子なの！」

小芝居を始めたアクア組を無視して。

「しかしダクネス、いいのか？ アクアが言う通り、ナイトアーマーは攻撃能力を持たない防御専門のメダロットだろ。ブレザーメイツみたいに一方的に攻撃されるのがオチ

だぞ」

「構わん。私と一緒に、こいつも我慢強い性格にしてある。遠慮せず攻めてこい！」

「ソウデス。バンバンキナサイ！」

「メダロットにもお前の趣味を押し付けるなよ……まあいいか」

ダクネスが使おうとしている戦術はある程度予想できる。

攻撃パーツがないメダロットでも、攻撃手段はあるということだ。見た目だけで戦術の8割がわかるのがメダロットだが、逆に言えば残りの2割は見た目だけではわからない。

「それじゃ順番的に私がレフェリーね。いくわよ？ それでは——」

「ロボットルファイト！」

——10分後。

「うう、勝てなかった……」

「カテマセンデシタ……」

ダクネスとぼろぼろになったナイトアーマーが、揃って肩を落とす。

「俺の勝ちだな。……まあ、こちらの攻撃を自前の装甲で耐えつつエネルギーを貯め、メダフォース『体当たり』で逆転を狙うつてのは悪くない案だったよ」

そう、ダクネスが選んだ戦術は、メダフォースを使うことだった。

メダフォースはダメージを受けたり行動によって貯まるエネルギーを一気に消費することでメダル固有の必殺技を放つものだが、中でも『体当たり』は全てのメダルが習得していて攻撃パーツを持っていなくても発動できるという特徴がある。ポケモンの『わるあがき』のようなものだが、くさつてもメダフォース、その威力は侮りがたい。当たり前どころが悪ければ一気に機能停止に追い込まれるくらいの威力はある。

「しかしお前のメダロットはそのメダフォースすらも躲して見せたではないか……いや、さすがに長いロボトルの間に何回か掠めたこともあったようだが、パーツの一つも壊せなかったようだし」

「防御体勢モ、何度モ中断サセラレマシタ」

「防御を中断させる攻撃か。……めぐみんも行動をキャンセルさせられたと言っていたな。未だ姿を確認できていないが、お前のメダロットはいったい——」

「カズマ、こうなったらチーム戦よ！」

ダクネスが問いかけようとしたところで、アクアが声を張り上げた。

「チーム戦だと？」

「ええ。メダロットの戦いは本来3対3が基本……。これまでの戦いは序章よ。ええ、確かに私のメダロットは支援しかできないし、ダクネスのメダロットは防衛しかできな

いわ。でも、チームを組めばお互いがお互いの欠点を補うことができるもの」

「確かにそのとおりだが……。まあいいだろう、かかってこい！」

「言ったわね？ さあ二人とも、いつまでもメソメソしていないで、カズマを倒すわよ！」

「わ、わかった」

「わかりました。行きますよ、我が使い魔よ！」

「「それでは」」

ロボトルファイト——！

——終了!!

「なんでよー!!」

「3対1ですよ？ これでも勝てないとは……」

「うう、また私のナイトアーマーがボコボコに……」

「当たり前だ。こっちはそちらが使ってくるだろうメダロットを想像して、それにメタ張ったメダロットを組んでるからな。まあ、そろそろ明らかにしてもいいだろう。俺のメダロットはな——」

「ちよ、ちよつと待って！ 当ててみせるから！」

「そうか？ じゃ3分間待ってやる」

「アクアは俺の言葉に頷くと、ダクネスやめぐみん、メダロット達と輪を作って相談し始めた。」

「カズマのメダロット、なんだと思う?」

「とりあえずステルス持ちですよ。姿を隠し、メダフォースのターゲットからも逃れていますから」

「それでいて私達のメダロットの行動に割り込んで中断させるような技を持っている」

「とはいえ毎回都合よくキャンセルできるというわけでもないようです。パーツ使用のために必要な充填と放熱の隙間にどうしてもこちらの行動をキャンセルできないタイミングが生まれるためだと思われませんが……しかしその隙に放った私のアークビートルの両腕攻撃も、ダクネスのナイトアーマーの体当たりも、大したダメージはないようでした。装甲も厚いと思われれます」

「うーん……こないろんな能力を持ったメダロットなんていたかしら……。いくつか似たようなのなら思い浮かぶのだけれど」

「私の記憶にもありません。果たしてどんなメダロットなのか……」

「アクア達は頭を悩ませていたが、結論は出なかったようで。」

「……3分経った。いいぞ、教えてやる」

「うう、なんか向こうから明かされると負けた気分……」

「俺のメダロットは、こいつだ——！」

■ 続く ■

第四話 カズマ注意報

「俺のメダロットは……こいつだ！」

「は、反則だー!!!」

皆が一斉に、俺とそのパートナーであるメダロットを指差しながらぎやいぎやい叫んだ。

——俺のメダロット。

ステルス機能を持つソニックスタッグの頭部パーツ『エクスレイ』。

相手の行動を妨害するバグ症状を付与する、イエロークリックの右腕部パーツ『クックンストーブ』。

保険として付けた盾、アーマーチャリオの左腕部パーツ『レフトスクトウム』。

そしてバランスのいいソニックスタッグの脚部パーツ『アウトストリップ』。

俺の隣に姿を現したのは、いろんなメダロットのパーツを組み合わせて作った、いわばカメラのメダロットだった。

「ああ？ 俺のメダロットの何が反則なのか言ってみろ！」

「だ、だって！ 普通キャラクターのイメージに合うメダロットって言ったら、型番を揃えたメダロット一式を持つてくるものでしょ!? そ、そんないろんなパーツを組み合わせたメダロットなんて反則よ！」

「そんなルール知らん。いつ、誰が決めたんだ」

「え、ええ？ それは……」

アクアがたじろいだ。

そんなルール、決めた覚えはないと自分でもわかったのだろう。

……とはいえアクアが言うことにも一理はある。アニメや漫画などでキャラクターのパートナーとなるメダロットは、型番を揃えた純正メダロットであるイメージが強い。イツキならメタバース式、コウジならスミロドナット一式といった具合に。

しかしそれはあくまでイメージであり、彼らも戦う相手によってパーツを変えたりといったことは割と普通にやっているのだ。

だから俺だって、躊躇する理由はどこにもない。

「メダロットってのは、パーツを組み替えて、いろんな地形や相手に対処できるような自分だけのメダロットを作り上げることができるといえるのが売りの作品だろ。自分達で勝手に縛りルールを設けて遊ぶくらいなら俺は何も言わないが……それをこちらにも

押し付けて反則だのなんだの言われたんじやたまらないな。そうだろ？」

「は、はい。そうです……」

「それにこのいろんなメダロットの特長を組み合わせたメダロットと、いろんな職業の長所を組み合わせたスキル構成である俺。イメージもぴったりじゃないか？」

「確かにそのとおりです。すみませんでした」

言い負かされたアクアがすごと引き下がった。

しかしそこで選手交代とばかりに、めぐみんが声を上げてくる。

「ちよ、ちよつと待ってください。それなら私達も、いろんなパーツを組み替えたメダロットを作り上げて、あなたのメダロットに対処するチームを作り上げてもいいってことですよね？」

「そりやもちろんだ」

「わかりました……。アクア、ダクネス、そして我が使い魔達よ。作戦会議をしましょう。私達で今度こそカズマを打ち負かすのです」

「わ、わかつたわ！」

「ああ。望むところだ」

アクアとメダロット達が、再び肩を寄せ合って相談し始めた。

「ふ……これでようやく楽しめそうだ。なあ？」

「ン」

「……」

「……」

俺はパートナーに声をかけたが、聞いていたのかいなかったのかわからないような短い相槌しか返ってこなかった。

ステルス機能を万全に発揮できるようにと思つて無口の性格にしたのだが……いや、その選択は間違いではなかったと今でも思っているが……アクア達がメダロットと一緒にになってああでもないこうでもないという騒ぎながら戦略を練つてるのを見ると、ちよつと羨ましくなってきた……。

「カズマ。待たせてしまったな。すまない」

作戦会議が終わったのか、ダクネスが声をかけてきた。

「おう、相談は終わったか」

「ああ。見てみるがいい。これが、私達の新しいチームだ——！」

■ 続く ■

第五話 たこ殴り大作戦！

「私達の新しいチームは、これだ！」

ブレザーメイツは、その後継機であるブレザーマルチ一式に組み換え。

アークビートルは、左腕に盾を備え。

ナイトアーマーは、左腕にソードに換装していた。

「なるほど、こう来たか……。よし、それじゃこつちもパーツをひとつ組み換えさせてもらうからな」

「ちよ、ちよつと！ こつちのチームを見てから換えるなんてずるいわよ！」

「1対3を受け入れてやってるんだぞ。パーツひとつくらい見逃せよ。……まあそうだな。またステルスで隠れてパーツの謎解きさせるつても芸がないし、換えたパーツは教えておいてやる。俺が組み換えたのはこいつだ！」

俺が組み換えたのは、さっきまでは盾を持たせていた左腕パーツ。

ソニックスタッグの左腕パーツ『ブラッキハンマー』に変更していた。

「左腕パーツを……ハンマーに？」

「さっきまでの俺のメダロットは火力不足がちよつと目立ってたいた。装甲が薄いアークビートルやブレザーメイツ……いや、ブレザーマルチならともかく、ナイトアーマーを崩すのには時間がかかる。それが命取りになりかねないと思つてな」

「なるほど、私のアークビートルも盾を装備して装甲が厚くなりましたしね」

「むー……しようがないわね」

「よし、始めるぞ。それでは——」

「『ロボトルファイト!』」

「よし、まずは防御を整える! 『ナイトシールド』を使用だ!」

「ワカリマシタ」

開始直後。

ダクネスのナイトアーマーが飛び出し、背後の二体を守るように右腕の盾を構えた。

だが、即座に俺のメダロットの攻撃を受けて防衛体勢が中断させられる。

「バグ攻撃のことを忘れたのか？」

「忘れちゃいないさ。ただ、一回でも攻撃を防げれば十分なんだ……めぐみん!」

「アークビートル! 『イグニッション!』!」

「ガオオオツ！」

ナイトアーマーと入れ替わるようにしてアークビートルが背後から現れ、その右腕から放たれた弾丸が俺のメダロットを捉えた。

「ち、左腕防御！」

「ン」

「くつ、パーツ破壊までには至りませんでしたか……。やはり充填をケチらず『狙い撃ち』を使うべきだったようですね」

「ああ、ちよつとヒヤツとしたぞ」

アークビートルの右腕パーツ『イグニッション』には『狙い撃ち』のサブスキルがある。

必要な充填時間が長くなるかわりに相手に回避と防御を許さない効果があり、もし使われていたらいずれかのパーツは破壊されていただろう。

「カズマのメダロットがアークビートルの対処に追われてる隙に……。ナイトアーマー、もう一度『ナイトシールド』！」

「ハイ」

「また防御体勢を作られたか……。！」

「そしてこちらが受けたダメージはプレザーマルチちゃんが即座に回復！ 『アルバ』発

動!」

「あい、アクアさま」

ブレザーマルチの右腕から発せられた光が、ナイトアーマーの傷を回復していく。

ブレザーマルチはメイツ同様、支援と回復能力を持ったメダロットだ。

これで状況は振り出しに……いや、俺のメダロットだけが一方的にダメージを受けた形となった。このままでは回復手段を持たない俺のメダロットはじわじわと斃り殺しにされてしまうだろう。

「考えたな……! だが、まだ手はある。『エクスレイ』発動!」

「ン」

「また姿を隠したか!」

俺のメダロットの姿がステルス効果によりかき消える。これで俺のメダロットは一定時間ではあるが相手の攻撃パーツやメダフォースの対象とならず、しかも相手の防御体勢を無視して他のメダロットに攻撃できるようになった。

「甘いわ! ブレザーマルチちゃん、『セーター』で索敵!」

「あい」

ブレザーマルチの頭部から飛ばされるレーダー電波。

俺のメダロットの位置が即座にばれ、それが敵チーム全体に伝達される。

「そこですわね……!! アークビートル、『イグニッション!』」

「もういつちよステルス」

「ああつ!! ず、ずるい!」

俺のメダロットは再び姿を消した。

こうなるとステルスと素敵のいたちごっこになりかねないが、奇しくもお互いともにその能力を発動しているのは頭部パーツ……頭部パーツは強力な能力を備えているものが多いが、代わりに使用可能回数が制限されている。この状況はそう長くは続かないだろう。

「ステルスの回数が切れたときがあんたの最後よ、カズマー!」

「そうでもないさ。状況を変える手はまだある! 『トランスパーツ』発動!」

「ええっ!?!」

俺のメダロットの右腕が光に包まれ、パーツが別のものに変わっていく。

トランスパーツはロボトル中一度に限り、チームリーダーのパーツを交換できるものだ。それによって俺が呼び出したのは――。

「カズマのメダロットの右腕が、ソードに!」

「そう、しかもただのソードじゃない。これはソニックスタッグの右腕パーツ……条件

は全て揃った! 『メダチェンジ』発動!」

「!!」

俺のメダロットはステルスの効果時間の合間にチャージを重ねていた。

そしてトランスパーツによって純正一式の姿を取り戻したソニックスタッグは、メダチェンジ機能を持っている。強力な能力を発する形態に変形できるのだ。

「行け、ソニックスタッグ!」

「ン」

「ぐっ……速い! 捉えきれない!」

ソニックスタッグのメダチェンジ形態は、戦闘機を模した姿。

脚部は飛行タイプとなり、とにかく速い。攻撃が速い。回避が速い。

そしてその速度を以ってまず狙うのは――。

「!! アクア、狙われています!」

「もう遅い! 行くぞ、『がむしやら』アンチエア!」

俺の指示を受けてソニックスタッグが繰り出したのは、対飛行脚部特化攻撃であるアンチエア。

ブレザーマルチは飛行脚部のメダロットであり、しかもこちらは身を捨てて大ダメージ

ジを与える『がむしやら』のサブスキルも使用している。当たれば機能停止は免れない……！

だが。

「ふっ、めぐみんの予想通りだったわね……！ ブレザーマルチちゃん、『メダチエンジ』発動！」

「なにい!?!」

激突の瞬間、ブレザーマルチの重厚なボディの中から、ボクサーの様相をした機体が飛び出した。その脚部タイプは二脚。これではこちらのアンチエアは効果を十分に発しない……！

ブレザーマルチもメダチエンジ機能を持っているのはわかっていた。わかっていたが……ロボトル直前の組み換えやトランスパーツまで使ってこちらが不意打ちのように仕掛けたアンチエアに、あのアクアがカウンターを合わせるような形でメダチエンジ機能を使ってくるなんて、予想だにできなかった。

アクアが言うように、めぐみんが事前にここまで予想して指示を与えていたというのか。

しかも。

「捕まえられた!?!」

「ええ、捕まえられたわ! 『がむしゃら』を使った直後のメダロットは無防備なものね……!」

ブレザーマルチの大きな両腕にがっちり翼翼を捕まえられたソニックスタッグは、そのまま振り回され、バランスを失ったまま真上に放り投げられた。

「めぐみん! 今よ!」

「はい! 受け止めてみてください! 冥府をも焼き尽くす浄化の爆焰……灼熱の『プロミネンス』!」

めぐみんの合図とともにアークビートルの代名詞とも言うべき必殺ビームが放たれた。

眩い光の奔流がソニックスタッグを飲み込んでいく。

「くっ……『ど根性』おおお! 耐えろ、ソニックスタッグ!」

「え、ええっ!?!」

俺はメダルに能力を付加する宝玉であるメダリア、『ど根性』の効果を発動させた。その能力は、どんな攻撃をくらっても一度だけ耐えぬいてみせるというもの。

ソニックスタッグは光の中で焼き焦げていくが、まだその機能は停止していない。

このピンチを切り抜け、逆転を……!

「しかし後詰めのために私達がいる！ ナイトアーマー、『マツハソードR』！」
「なにいつ?!」

ダクネスとナイトアーマーがしばらく保っていた沈黙を破り、ここぞとばかりに一気に詰め寄ってきてその左腕に携えたソードでボロボロのソニックスタッグを貫いた。

メダリア『ど根性』の効果は一度きり……今度はその効果は発動されない。

ソニックスタッグは倒れ、機能停止の証としてメダルがティンペットから排出された。

皆がそれを確認して……。

「か、勝ちました……!」

「やったー、勝ったわ!」

「よくやったお前達!」

アクア達はようやく得た勝利に、歓喜の表情を隠さなかった。

俺も緊張感が抜け、大きく息を吐く。

「ふう……まさかここまで完璧に戦術を予想されるとは思わなかった。やるな」

「ふふ、頭部と脚部はソニックスタッグのものでしたからね。メダチエンジを使ってくるであろうことはなんとなく予想できました」

「ねえカズマ、どんな気持ち？ ロボトル直前の組み換えやトランスパーツ、メダチエン

ジまで駆使したのに、読み切られて負けちゃって今どんな気持ち？　ねえねえー」

アクアが煽ってくるが。

「……いやー、くやしいわー。1対3で負けちゃってくやしいわー。よーし、それじゃ次からは俺も3体使うからな」

「!?!」

俺の言葉に、湧き上がっていたアクア達が凍りついた。

「え、ええ……?」

「何呆けた顔しているんだ。チーム戦だって言ったのはアクア達だろ。そっちが3体のチームを組んでるのに、こっちは使ってはいけないなんてことはないよなあ……?」

「!?!」

俺はメダロットを操作して、追加2体分のメダロットを組み始めた。

アクア達はそんな俺を凍りついたまま眺めていたが、幾分か経って我に返ると、再び肩を寄せ合って相談し合う体勢になり――。

「めぐみん、カズマが使つてきそうなチームとか想像つかないの？　さつきはあれほど見事にカズマのメダロットを封殺してみせたじゃない」

「わ、わかりませんよ。パーツの組み合わせ数は有限とはいえ、カズマのこすつからい思考や指示を出すタイミングなども考慮すれば戦術はそれこそ無限に広がります。それ

が1体のみならず3体ともなれば、完璧に想像して対処を用意するなんて不可能です！」

「カズマのメダロットは格闘一辺倒だったから格闘ガードを用意すれば盾は一枚でも……ああいや、次は射撃攻撃も混じえてくるかもしれないからトラップを追加して……いや格闘の対処も怠るわけにはいかないからいつそ盾役が二体……いやそんなことをすれば火力が足りなくなる……あー、どうしてメダロットの行動パーツは1体につき3つしかないんだ！」

「3体のチームでも計9つの行動、メダチェンジを最大限に活かしても18の行動しか作れないしね……」

「でも連携を組み合わせればもつと幅は広がりますし、カズマだって条件は同じです。だったら相手の行動がどうであろうと先に殲滅してしまえるような速攻陣形を作れば——」

「でも速攻をしのがれたら冷却中に一気にピンチになるわよ？ やっぱり回復や盾みたいな保険も必要だと思おうの——」

「こちらのメダロットは組み終わったが……」

「あちらの議論はまだ終わりそうにない。」

「悩め悩め。対戦のために悩む。それもメダロットの楽しみだ」

もつとも、いくら悩んだところで万全に対処できる最強のチームなど作りようがない。

ある強力な戦術を使うチームが現ればそれにメタを張るチームが現れ、次にそのチームにメタを張るチームが現れ……というのはずっと繰り返されてきた流れだからだ。

だから、メダロットは終わらない。

たとえそれが細々とした流れになろうとも、その流れを維持する人が必ずいる。

誰かがメダロットを、好きであり続ける。

こんな異世界に来て、忘れることができずに再現しようとした人がいたように。

「だから、これからもメダロットで遊ぼう」

【夢】の時間は、まだ残っているから。

■あと一話だけ続く■

エピローグ ゆんゆん、グレル

「いやああああ！ こんな私のプレザーメイツちゃんじゃないー！」

「うるせーぞ、我慢しろー！」

アクアが泣き叫ぶ声が、決して狭くはない屋敷の中でも大きく木霊する。

「だいたい、お前がサキュバスのお姉さん達を困らせるからいけないんだろうが」

「だって！ だって！」

なんでもアクアは【夢】の中で出会ったプレザーメイツが忘れられなかったらしく、サキュバスが運営する喫茶店に通いつめては【夢】を見ることをお願いするようになったらしい。

サキュバス達も最初は笑って受け入れていたらしいが、精気を吸うこともできない女性が店に通いつめてくるなど営業妨害もいいところであり、何日か経過してさすがに限度を越えたとカズマに引き取りをお願いしてきたのだ。

サキュバスの訴えを聞いて激怒したカズマだったが、アクアがサキュバスの店に通いつめていた理由を聞くと、一転、ばつが悪そうな顔をした。メダロットを【夢】に見るという話のきっかけはカズマだったからだろう。

しかしサキュバスからの訴えも無下にはできない。

そこでカズマはアクアに【夢】の代案となるものを提案した。それは、世界のあちこちに点在する魔道技術大国ノイズの遺産を使って現実にブレザーメイツを再現することだった。

何しろかの国の技術者は高性能な美少女型ゴーレムまで作り上げていたのだ。その手の設備や技術を駆使すれば不可能ではないだろう。

そして数々の冒険を経て完成したのが――。

「嫌よおおお！ ツインテールを軸にして回転蹴りしてくるブレザーメイツなんて！

あの純粹無垢なブレザーメイツちゃんを返して！ 返してよ！」

どうも素体としたのは――いや、素体にできたのは、いつぞやのSMプレイ用に作り上げられたゴーレムだけだったらしく、しかも性格などソフトウェアの分野は《鍛冶》スキル持ちのカズマでもお手上げだったようだ。

結果、SMプレイ用の性格設定のまま、ガワだけがブレザーメイツとなったメダロットもどきが誕生して、アクアが泣き叫んだという経緯だった。あれはあれで可愛いと思うのだが……。

「へえ、そんな話だったの」

「そうなんですよ。ゆんゆん」

屋敷に遊びにきたゆんゆんに、私は経緯を説明した。

それぞれゲームガールをピコピコ動かしながら、対戦用のチームを組んでいる最中だ。

「んー。でも、メダロットが現実にはたらかあ……。ねえ、めぐみん。私のパートナーのメダロットって、どんなのがいいと思う？」

「そうですね……。こんなのはどうですか？」

そうやって私は自分がいじっていたゲームガールをゆんゆんに見せてみた。

画面に映っていたのは――。

「CAB型スワロウテイル……。？ ええと、このメダロットと私と、どう関係が？」

「はい。このメダロットはですね……。ああ、このテキストを見てください」

「へえ、なにに？」

|||||

水商売のおねえさんがモチーフのメダロット。

夜の帳（とぼり）が降りるとき

気の抜けたジャージ姿から

カズマとアクアの方に視線を向け……なぜかくすりと笑った。

「ゆ、ゆんゆん!? どうしてカズマにそんな色っぽい視線を向けているんですか!」

「やだなあめぐみん、辺りを見回したら、カズマさんがちよろつと視界に入っただけじゃない。偶然よ、偶然」

「それならどうして今、胸元をいつもより開けたんですか! なんでスカートをもう一回折ったんですか!」 ちよ、ちよつと、こつちを見て話してください!」

「うーん、ほら。私、水商売のおねえさんだから、それらしい格好してもいいかなあって。あ、そういうえばめぐみん、結局まだカズマさんと一線越えてないのよね?」

「なんでそれを今聞いたんですか!」 あ、謝りますから! 今日のところは私の負けでいいですから、やめてください! あの男なんだかんだ言っただけの子から誘われたらホイホイついていきそうで——!」

■おわり■